

宮坂廣作先生のご退職にあたって（宮坂廣作教授退職記念号）

著者名(日)	椎名 慎太郎
雑誌名	山梨学院大学法学論集
巻	45
ページ	1-3
発行年	2000-05-25
URL	http://id.nii.ac.jp/1188/00000836/

献辞

——宮坂廣作先生のご退職にあたって——

宮坂廣作先生は一九九九年三月をもって山梨学院大学を退職された。先生は東京大学を定年退官直後の一九九二年四月に、法学部行政学科新設に伴う人事として本学法学部教授に就任された。法学部行政学科では「教育行政学」、「地域おこしと生涯学習」、「現代社会と市民形成」の講義のほか、専門演習等の科目を担当された。一九九五年に新設された大学院公共政策研究科にも設置メンバーとして名を連ね、生涯学習の特殊講義と演習を担当された。その他、わずか二年間で休講そして廃止の結果となったが、私と共に行政学科で「行政と文化」という、多分本学では初めてだと思われる総合科目を担当された。先生の講義は独特のメリハリのある語り口で、しかも自ずから溢れる学識に裏付けられた見事なもので、「行政と文化」の受講生と共に聴講した私もおいに教えられた記憶がある。

こうした学生・院生教育でのご貢献以上に注目されるのがご就任直後から準備を始めて設置・運営にあたられた山梨学院生涯学習センターでのご業績である。先生はいうまでもなくこの分野では全国に並ぶものがない第一人者である。その先生が東大教授から地方私学である本学にいられた理由は、後述するように他にもあるのだが、古屋学長の指導のもと、地方私学としておおいに存在感を発揮している本学で、国立大学ではできなかった本格的生涯学習の実践活動に意欲を燃やされたことも、大きかったはずである。私は行政学科新設準備に関わっていた事情か

ら宮坂先生が古屋学長とご就任について話し合う機会に同席したのであるが、その席上で現在のセンターの構想を熱っぽく語っておられたことを記憶している。

ご就任とともに開設された生涯学習センター準備室は当初予算もなく、もっぱら宮坂先生の超人的エネルギーだけで運営されていたといつてよい。もちろん、本学にはそれ以前に「ビジター・スチューデント」、法学部による甲府市や石和町等との提携公開講座、各種の公開講演会等の事業はあったのだが、これを「山梨学院の生涯学習事業」として一貫した理念のもとに現在見るような多彩な発展へと導いたのは、先生の創始された生涯学習センターである。先生はまず地元自治体との連携に力を注ぎ、文書での呼び掛けにあまり積極的反応がないと自ら「セルス」と称して各市町村教育委員会を行脚された。すでに四年の実績をもつ県民コミュニケーション・カレッジ事業も先生が存在なくては考えられない。センター紀要はじめ各種の出版物のかなりの部分も宮坂先生の筆になるものである。現在では県内大学短大で唯一専任職員を配置した生涯学習センターとして各種事業の中心としての位置を確立している。なによりも、生涯学習とは何かということに先生はこだわり、真の生涯学習事業のあり方を自ら示してこられた。ここまでの実績づくりに先生が注がれたエネルギーは大変なものである。小生はなぜか先生のご退職の一年前の一九九八年四月に二代目のセンター長に任ぜられたのだが、先生の足跡を真似てあれこれとセンター事業に参加していたら、その年の暮れには体調を崩してしまった。スーパーマンの真似を凡人がしてはならないと教訓を得た次第である。

宮坂先生は何事によらず筋道を大切にされる方である。そのためにときには他の方々と多少の不協和音を生じることもあった。しかし、それは決して私利を求める自己主張ではなく、先生の信ずるあるべき筋を通すためであっ

た。そして、それ以上に、先生は至誠の人である。東大退官後に山梨学院に職を求められた最大の理由は、当時諏訪市の角間新田に独居されておられた高齢のお母上と同居して通える大学であるということであつた。しかるに、なんとということか、就任の辞令が伝達されてまだ講義が始まる前の一九九二年四月五日にお母上は率然として亡くなられてしまった。これは先生にとつて大変なショックであり、「本年四月以降の生活設計がまったく狂つてしまつた」(『額の汗を野にそそぎ―父母の記』)と先生自身が書いておられる通りに、山梨学院大学選択の意味を全く失わせる事態であつた。しかし、その後の先生の本学における誠実なご活躍ぶりには決してその言葉を窺わせるものがなかつた。七年間にわたる本学での教育者、研究者そしてセンター指導者としてのお仕事はまさに全力投球であつた。

私は研究者としての宮坂先生を語る資格をもたない。巻末のご業績をみれば誰もがその意味を理解されるであらう。ただし、私が本学教授ご就任前から宮坂先生のご著作にふれ、密かに宮坂ファンであつたことはいつぞや先生に申し上げたことがある。そのファンとして、先生が今後もますます活躍されることを願つて、拙い献辞とする。

椎 名 慎太郎